



〈書評〉新庄博著「金融論」

宮田，喜代藏

(Citation)

国民経済雑誌, 84(4):49-51

(Issue Date)

1951-10

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/80040124>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/80040124>



書評

新庄 博 著

「金融論」

宮田 喜代 蔵

教授はさきに「通貨安定の研究」を世に問われて裨益されたが、茲に公にされた「金融論」は特色豊かな理論的体系として注目される。本書の特色は、一 従来の金融論が金融するという現象を私経済的な立場から解明したのに対し、資金をば資本制経済の全構造との関聯において考察すること。二 経済学の基礎から遊離しない「金融経済論」ともいふべき性格をもつこと。三 その基礎となる経済学なるものが新しく巨視的理論に移り所得論中心に交つて来たことに照応して、金融経済論もこの新しい経済学の体系に基礎をおいていること。そこで私は本書が弘通の金融論と区別されてもつ特色をできるだけ浮び上らしめるよう紹介していこう。

第二章 貨幣経済構成の基本的理論は、この金融経済論の掘つて立つている経済理論がどんなものであり、それとどんな関聯をもっているかが明かにされている。本書は出発点としてマルクスの再生産表式を取上げ、それは「資本と所得の再生産過程の骨格を理解せしめるための有用な構想として高く評価さるべきであるが、しかもこれを直ちに現実の貨幣経済にあらはれては用うべきでない」という。次いで貨幣的経済理論の試みのうち最も注目すべきものとしてケインズの一般理論を取上げ、「我々の知識がこれによつて組織化されえたものが多いが」しかし貨幣経済の理論の立脚すべき経済学的な基礎構造理論に欠けていることを批判する。著者はこの点を若干の例について具体的に指摘しているが、このケインズ批判は傾聴すべきものがある。

第三章 本位貨幣と通貨。資本主義の現段階における貨幣を対象とする限り、貨幣と金との本質的關係を認めねばならず、このことは十九世紀の後半国際金本位制の成立したことの中に表現されている。かくて一方貨幣と金との本質的關係を否定する名

目説は現実から遊離していると批判するとともに、他方古典学派が価値尺度としての貨幣を否定し、単に交換手段としての貨幣を認識して貨幣ヴェール銅たるに至つたことを難じ、著者は「価値尺度の存在を要請するとともに、その役割を現実に果たしつつあるものとして金を指摘している。(七六) 尤も著者にして「金が価値尺度として論理的に不可欠なのは究極的には国際的な資本家的自由主義の生産交換様式と關聯している」(九二) と言うならば、現段階が自由主義的体制を乗りこえている限り、その程度において国内的に金が本位貨幣たる意義と地位は交還したと言いつるのではなからうか。なおかくては金が価値尺度として機能することの意味も變化し、貨幣本質の名目性が浮び上らざるをえないのではあるまいか。

三

第四章 金融の実体と作用。 金融をば通貨の融通・貸与と解する通説に対して、著者は貨幣によつてその額を表現される購買力従つて所得の融通なりと解する。しかもその購買力を流通手段としての通貨によつて説明せず、価値尺度としての貨幣に基づいて説明するのであつて、これによつて金融現象が經濟全体の上に正しく把握され、金融理論及び金融政策が一般經濟理論及び一般經濟政策と内面的に關聯せしめられる道が開かれた。

第五章 資金の需要。 資本主義における金融は私的資本の形成とその運動に關聯せる貨幣資本の需要として現われるものである、それは本来の意味における投資需要のみでなく再投資のためのもの、將來の使途とは別に單に資本を最も流動的な貨幣形態で

保有しようとする場合をも含む貨幣資本一般に対する需要を内容としている。

第六章 資金の供給。 金融市場における需要及び供給をば投資と貯蓄として取上げ、投資貯蓄均衡論を説き、これによつて利率の決定を明かにする支配的學説が貨幣經濟の分析論として不徹底なることを批判し、自らは「資金の需要をば本来の投資から再投資まで拡大するとともに、資金の供給の側でも貯蓄の外に信用創出を加うべきことを主張する。この信用創出の分析のうち「資本の再生産構造を拡大する起動力は貨幣資本の供給増加にまつものであり、従つて經濟の發展が常に信用の創出、國民所得の増加を契機としていることが原理的に明かにされるとともに、また「資本主義的生産が信用制度を通じて容易に資本の供給過多に導き、屢と一般的過剰生産にまで發展せしめる理由のあることが明かにされている。(一五五—六)

四

第七章 財政と金融。 資金の需要としてはなお國家其他の公經濟からする需要がある限り、金融論が財政と金融との關係を取上げることが当然であり、この問題は現実にも最近著しく重要性をもつて來た。本書は主として二つの問題を取扱う。一つは現代における金融と財政との必然的關係は伝來の私的投資を本体とする基盤に立ちそれに依存する財政から、財政によつて補整され、財政政策の重要な役割の欠くことのできないものに變質せるところに特質がある。(一六五) もう一つの問題は、國家も亦金融市場の内部に位する限り、その作用法則から獨立ではありえないと同

時に、国家の收入及び国家信用の性質を逆用して経済に対する人為的干渉作用を行いうることを明かにしている。

第八章 利潤と利子。利子率を究極的に規定するものは利潤率であることを説いた後、市場において変化する利子率を決定するものは何かを尋ねる。そしてこの決定要因を通貨または現金に対する需給と解する説に対して、購買力又は貨幣資本と解された貸付資金の需給であると主張していることは、前述の金融の実体に対する著者の態度から当然の帰結である。そして投資をもつて資本需要、貯蓄をもつてその供給と解し、両者を均衡せしめるところに利子率が決まると説くのに對して、本書では資金の需要は投資の外に再投資を加うべく、その供給とは既存の所得の貯蓄のみでなく信用創出に基くものを加うべしとする。

第九章 金融市場の内的考察。

第十章 金融機關の分類を試みたもの

第十一章 金融政策。上乗の金融の理論から通貨の數量を内容とする政策の限界を明かにし、資金或は購買力への政策が意図されねばならぬことが結論されている。通貨量の調節による物価安定政策から、投資と貯蓄の均衡により、所得の安定によつて、更に投資と消費の均衡に進み、遂には完全雇傭の実現を目標とすることに至る。最後に金融政策の動向について「自由主義時代には自由主義的國際經濟機構に自動的に作用する法則に忠誠なるよう受動的な態度をとつていたが、統制經濟・計画經濟に於ては國家の積極的意思による能動的指導が代る。」(二八九)そしてその統制は量的統制から質的統制に進むとともに、単に金融面における政策のみを強行するのでは足らず他の面の種々なる統制政策の

背景を必要とする。

五

以上明かにしたように本書の特色は金融經濟論として一貫してみられる。教授はまず資金・資本を取上げ資本制經濟の全構造との關聯において考察を進める。而も自由主義的經濟體制における金融現象を理論的に究明するとともに、最後には統制經濟體制における金融政策の動向をも指示している。そして「經濟そのものの計画化なくして金融のみ計画化しえずとして資本主義下の金融政策に一定の限界のある」ことを示し、「我々は大きく資本主義經濟自体の組織化の傾向を窺取することができる」(二九六)と結んでいる。

吾々は本書が従来の金融論に類い稀れな広い視野と深い經濟的基礎をもつ「金融經濟論」として新しい理論的基礎を与えられた貢献を高く評価する。しかもそれであればこそ、本書を支える二つの柱たる再生産表式論とケインズ理論とがいかに統一されて全体系を基礎づけていくかをより以上明確に浮びあがらしめられんことを望むものである。

(昭和二十六年四月 有斐閣 B 6 二九六頁 二五〇円)